高校生40人とつくる美術鑑賞ツアー

「全国高等学校総合文化祭」（以下、総文祭）は一年に一度、日本全国から高校生が集結し演劇や吹奏楽などをはじめとする様々な文化活動を発表する場です。2014 年、茨城県がホスト県となる本大会に先がけ、2013 年夏に各部門のプレ大会が開催されました。プレ大会中のフィールドワークとして行われた「高校生 40 人とつくる美術鑑賞ツアー」には、ボランティア部門の高校生 40 名が参加しました。
夏真っ盛りの 8 月 20 日、水戸芸術館に集まり、視覚障害者とともに鑑賞したのは、曽谷朝絵展「宙色（そらいろ）」。
参加者全員が自分の言葉でコミュニケーションをとり、美術鑑賞を通して、様々なことを発見しました。

高校生の感想

ナビゲーターの感想

水戸のボランティアクラブの女子高生六人に対面した時、幼い子供としか思えない声だった。話し方も声も中学生としか思えなかった。

お互いに何をどうしたらいいのかためらっていた。この日のためにシークレットシューズを買いそろえ髪を短く揃え、髭も鼻毛もしっかり橇、清潔に心がけてきた。果たしてそれが女子高生たちにどう映ったのかはわからない。

作品の前に立って。

「なんと言っていいんだか……」

女子高生は作品の前に来てとまどっていた。もどかしくなり。

「画面は紙なの？それともキャンバス？」

「紙ではないみたいです。こんな模様で、いろんな色があります」

「こんな模様って？」

手を動かして形をいろいろに動かしてみたら、誰かが掌に指で形を描いてくれた。すると違う生徒が背中に模様の形を描いてくれた。それをまねて空中に線を描いて「わかった、それで画面には暗い色はないんだね。それじゃあタッチはどうなの？筆で描いたのかな？」

「タッチはなくて垂らしたようです」

このあたりで作品の様子がつかめてきた。少しづつコミュニケーションがつかめてきた感触があった。それからは活発な発言がどんどん出てきた。

大谷重司さん

うまく伝えることができるかどうかの不安がありましたが、当日視覚障害者と絵を見てできるだけ正確に伝えようと普段絵を絵を見るときよりも作品を深く見る、考えることができた新たな一面を発見しました。

絵の具の飛び散り方を伝えるのに皆さんはジェスチャーで一生懸命表現してくれていたようですが、見えない私にはわからない。そこで私の手を持ってもらって筆使いを再現してもらいました。上から下へ、勢いよく振り下ろす様子で、「わかった、通じ合えた！」と思えた瞬間、うれしかったです。

たまたまグループになった知らない顔同士の高校生たちが初めての美術鑑賞、しかもその中に初めて接する視覚障害者。そんな初めてだらけの中、皆さん苦労しながらも誠実に言葉で伝えようとしてくれてありがとうございました。高校生の皆さんと一期一会のグループでよい時間を共有できました。

印象に残った感想があります。「誘導する時に肘をつかんだ手が暖かくて、同じ人間なんだと思いました」 気付いてもらえてよかった、この気持ちいつまでも大切にしてもらいたいです。

高橋雅枝さん
＆盲導犬テス

森山純子さん
水戸芸術館現代美術センター
教育プログラムコーディネーター

ワークショップでは、参加者には用意した「答え」ではなくそれぞれの「気づき」や長く残る「問いかけ」をお土産に持ち帰ってほしいと考えます。今回総文祭プレ企画に参加した高校生はどうだったでしょう。他の学校の人と一緒に美術館に来て現代美術を観る。障害がある人と出会い作品を説明する。居合わせた人たちと感想や考えを交わす。…この日彼、彼女らに立ちはだかった「はじめてづくし」のハードル。混乱し、思うようにいかないもどかしさを感じたであろうことは想像に難しくありません。

「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」の皆さんには、高校生たちの戸惑いと精一杯の誠意を暖かく受け止めていただきました。遠路来ていただき本当に良かったです。ある生徒が考えたあげく「同じ…人間なんだと思いました。」という感想を漏らしました。その言葉はまったく正直で不思議と不快感を与えませんでした。高校生がこの日の出会い、人とつながり伝えあうことの難しさや喜びを出発点に、他者への想像力を蓄えながら、この先進んでいってほしいと願いました。

相手と自分が思っているものがちがったりして伝えるのが難しかったです。これをこれからに生かせていけばいいなあと思いました。

自分では考えてもみなかった質問をされて、ああ、こんな考えもあるんだなと思った。たのしく活動できた。

木下路徳さん

6 人の女子高生たちは、初めての体験に緊張しているのか、恥ずかしいのか、作品を前にしてもなかなか言葉が出ません。ときおりひそひそ話や「すごーい！」と感嘆の声は聞こえてくるので、何かしら感じているはずなのですが、それを言葉にするのは難しい様子。あっという間に最後の作品の前へ。その絵は、彼女たち曰く「模様が書いてある」とのこと。私は抽象画かなと思い、何に見えるか例えてみて、と促しました。すると、しばらくして「すいかの皮のよう」との意見が。即座に「ああ〜」と全員が力強く同意。さらに、この作品がほしいか聞いてみると、なんと全員ほしくないと答えました。理由は、「こんなおだやかな模様じゃなくて、もっと炭酸がはじけるような絵が見たい」とのこと。彼女たちならではの意見がようやく聞けた瞬間でした。感想は、「わからない」でも「好きじゃない」でもいいのです。肝心なのはなぜそう思ったのか。そこに主観が表れるので、それを聞けたことが一番面白かったです。

抽象的な作品を鑑賞したので、説明は難しかったと思いますが、「オーロラのような絵」とか、「こっちの絵は、何だか動脈と静脈みたいに見える」など、感じたイメージを上手く伝えてくれたり、「ドッヂボールが出来そうなくらいの広さの部屋全体に赤とか青とか、黄色とかいろんな色が反射している」とか、自然に、上手に言葉で表現してくれたので、作品のイメージをつかむ事が出来ました。

普段は、同年代の参加者と鑑賞する事が多いですが、若い世代には、新鮮でみずみずしいまっすぐな感覚があり、３０分の鑑賞は、楽しくあっという間に過ぎました。これからもいろいろな世代の人と様々な作品鑑賞が出来たら嬉しいです。ありがとうございました。

普段ただただ見ているだけの作品を障害のある方々に口で説明するのは思っていたよりも難しく、時には苦戦することがありましたが、最後の方ではうまく話せました。このことを通して、互いに思いやる心を知り、相互の交流を深められてよかったです。

大川和彦さん

平重忠さん

視覚障害者の方々に絵について自分の言葉で伝えることがむずかしくてとてももどかしかったです。絵についてもっと知りたいと思ったし、また鑑賞ツアーに参加したいなと思いました。視覚障害者の方が楽しんでくれると私も嬉しくなりました。

「色は言葉で表現することで初めて色になる」という言葉を教えていただきとても感動しました。来年はもっといい大会になればいいと思います。

高校生たちは目にした映像を私に「なにから、どう説明したものか」と、戸惑っているのが伝わってきました。

私も「なにか聞かねば」と思うものの、視力は 0 なので、質問を投げかける手がかりがありません。

この一瞬の沈黙の後、私の誘導をしてくれていた生徒さんが、絵の大きさから説明を始めてくれました。

「20 センチかける 20 センチぐらいの絵です。そこに幾つもの色で・・・」と説明が続いていきました。

これで私にも「質問する手がかり」ができました。

私からは「今私たちは壁の前に立っていて、その壁は左右に、かなり大きいような気がします。高さもかなりあるようですね、そこに、そんな小さな絵がぽつんとあるだけですか」

すると他の生徒さんが「壁には幾つもの絵がかかっていて、その大きさもいろいろです。」と、この展示コーナー全体の説明をしてくれました。それが分かってくると、個別の絵の説明をしてもらう時間がないことがはっきりしました。そこで、このコーナーの全体イメージを膨らませたほうが「美術鑑賞にふさわしいのではないか」と私の中での方針が決まりました。そこで私から「では、壁はどんな感じですか。白一色ですか」と問いかけました。

こうして鑑賞会は始まりました。視覚的な映像を限られた時間内に言葉だけで 100 パーセント伝えるのは不可能です。私は「美術鑑賞とは、同じ作品を観て各自が感じた気持ちを交流しあうこと」と定義しました。

生徒さんの説明を聞いて私の中に私なりのイメージと感想が沸き上がってきます。それを言葉にしました。そのイメージは実際に絵を見ている彼らには頷ける場合もあるでしょうし、びっくりすることもあったでしょう。

彼らは自分たちが目にしていることを持てる言語力を総動員してなるべく性格に伝えようと努力してくれているのが分かります。

けれど先ほどの私の「美術鑑賞の定義」に照らすと彼らの「作品を観ての気持ち」が聞けないのが不満に思えてきました。そこで「なんでもいいから感想を形容詞で表現してみてほしい」と頼んでみました。簡単な一言が返ってきません。彼らは「正解の形容詞」を探しているのではないかと思ってしまいます。

こうなると私の視覚障害が有利に働きます。作品の感想は何でもオーケーなのだということを身を持って示せるからです。

作者の意に近い感想でもかけ離れた感想でも、私がなにか言えばそれに近い感想の生徒さんはそれらしい反応をしてくれます。また、私の感想とは違う感想の生徒さんもなにか反応して、その根拠となった映像の説明をしてくれます。

こうして鑑賞会は、グループ・メンバーの「作品を観たことで心に沸いた気持ちの交流」となって進んでいったように思います。

白鳥健二さん